

幸府画報

第 15 号

2022 年 11 月
(令和 4 年)

発行
太宰府市教育委員会
文化財課



バックナンバーはこちらから

調査見聞

齋藤秋圃生誕250年特集(4) 《島原の乱図屏風》研究序説

2000年を経て制作された大作

本作は、寛永14年(1637)に勃発した島原の乱平定に参戦した初代秋月藩主黒田長興を顕彰するため、10代藩主黒田長元(1637)の命によって作られた屏風です。乱から2000年の節目にあたる天保8年(1837)に完成しました。秋月城を出立して現地へと向かう藩の軍勢を描いた出陣図(左写真上)と、原城総攻撃の様子を描いた戦闘図(同下)とがセットとなった二対の屏風です。乱に参戦した藩士の証言や記録をまとめた小川碩翁『嶋原一揆談話』(1748年)など藩の記録を忠



上《嶋原陣図御屏風(出陣図)》

下《嶋原陣図御屏風(戦闘図)》

紙本着色 各162.3×368.6cm 秋月博物館蔵(朝倉市指定文化財)

実に絵画化していることとされ、島原の乱のリアルな二面を窺うことができる貴重な歴史資料となっています。

代表作か? 問題作か?

美術作品としても優れた本作は、秋月藩士の木付要人が記した「木付日記」に、要人本人と齋藤秋圃が屏風作成を命じられた旨の記述があり、作者は出陣図を要人、戦闘図を秋圃と伝えられてきました。しかしながら画中に落款印章はなく、戦闘図の作風も秋圃のものとは断定しづらい部分があり、これまで作者の問題を真正面から検討されることはありませんでした。

思い込みは禁物

そんなとある日。九州歴史資料館のI氏と秋月博物館を訪ね、常設のレプリカ作品を見ていたところ、I氏が出陣図を指さして「こっちが秋圃だ」と言い出しました。いやこっちは木付要人の作と思ったものの、画面を見て驚愕。戦闘図では探すのに苦労する秋圃らしい表現が、出陣図の方には随所に確認できるのです。でも記録上は秋圃ではないし、と首をかきあげていたら、秋月博物館のS氏からさらに驚きの一言が。「日記

にはどっちがどっちを描いたとは記されていません」と。

ではなぜ秋圃が戦闘図、要人が出陣図の作者とされてきたのでしょうか?これは秋圃が島原の乱図を描いたという言説が、いつしか乱の「場面」つまり戦闘図を秋圃が担当したという解釈にすり替わり、もう一方の出陣図の作者に要人をあてたためだと思われれます。秋圃の作か否かの問題が戦闘図のみに向けられ、出陣図をはなから見てこなかったことは、とても愚かな思い込みでした。

出陣図、戦闘図ともに複数の絵師の手が入っているように見られ、ふたりだけで作られたものではないようですが、具体的な検討はこれからのお楽しみ。近いうちに齋藤秋圃の代表作として紹介できるように研究を進めたいと思っています。(井形栄子)

※1 福岡市博物館蔵 ※2 筑紫野市歴史博物館蔵

【参考文献】

- 『島原の乱図 戦国合戦図』(戦国合戦絵屏風集成 第5巻 1981年 中央公論社)
- 『木付日記』(『甘木市史資料』近世編第1集 1983年 甘木市史編纂委員会)
- 『島原の乱図屏風』(週刊絵で知る日本史25 2011年 集英社)
- 『嶋原一揆談話』(朝倉市文化財調査報告書第20集 2014年 朝倉市教育委員会)



葵氏艶譜 ※1



出陣図



熊谷直実と平敦盛図 ※2



出陣図



戦闘図

メイシヨ メイブツ

榎社の菅公詩碑

吉嗣鼓山書「九月十日」

今年も9月22日・23日に太宰府天満宮の神幸式大祭が挙行されましたが、その御旅所のあるのが菅公の配所であったと伝える榎社です。

御旅所右手に1基の菅公詩碑があります。刻まれているのは「九月十日」と題する詩、大宰府に左遷される前年の昌泰3年(900)、長陽後朝の詩宴に侍った時のことを思い起こして作られたものです。その時、醍醐天皇からいただいた「恩賜の御衣」は今、ここ配所において、毎日捧持してはその余香を拝しているのだ、と切々と詠じています。

詩碑は、その筆致と刻まれた印章から吉嗣拜山の息子鼓山の書と知られます。裏面によると、昭和16年(1941)、朝鮮・京城の進辰馬・森啓助の両名がこれを造立したとあります。もとは天満宮にありましたが、のちにこの榎社境内に移されたものといえます。

(重松敏彦)



菅公詩碑



榎社御旅所

碑文「去年今夜待清涼秋思詩／篇独断賜恩賜御衣
今在／此捧持日毎拜余香 印章「梅華香処」鼓山」

逸品探訪

大宰府の絵師に関連する逸品・名品を紹介し

吉嗣鼓山作

【瓢箪に紅葉図】

光明寺の紅葉に着想

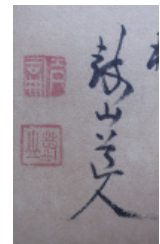
鮮やかに様々に色づいた木々。晴れた夕空は喜ばしく気持ちが高揚する。寺は錦の雲の中にあり、鐘の音もまたよい気分である。このような大意の五言絶句とともに、すつくと立つ大小の瓢箪と、折り紙のようにカラフルな楓の葉が描かれています。「光明精舎の観楓席上で筆を走らす」と書かれていることから、大宰府の古刹、光明寺の紅葉を見て作られたものとわかります。

3代目の個性は「書」

明治12年（1880）、拜山の清国渡航の翌年に誕生し、昭和32年（1957）に



〔賛〕
爛斑 紅樹 色尤喜晩
晴新 寺在錦雲
裏鐘聲 也可人
光明精舎 観楓席上
走筆 昭和廿七年
秋日 鼓山道人
紙本着色 扁額装 40.7 × 112.5cm
昭和 27 年 (1952) 吉嗣家資料



79歳で世を去った鼓山は、やわらかな筆づかいや淡い色彩表現など、祖父梅仙や父拜山の作風をよく学んでいたことが多くの現存作品から見て取れます。コロコロとした丸みのある書の雰囲気は拜山に似ている部分もありますが、鼓山の書は丸みがありつつもしなやかで、心地よい筆の走りやリズムが感じられます。絵とは対照的に墨色が濃く明瞭な書は、ひと目で鼓山のものとなる個性があります。

鼓山と瓢箪、いかなる関係？

さて絵の方は、秋の季語ともなっている瓢箪と紅葉が、輪郭線を用いず淡い色彩と軽やかなタッチで描かれています。吉嗣家資料にはこれと似たような瓢箪図がいくつかあり、鼓山は瓢箪を好んで描いていたようです。瓢箪といえば、縁起のよいものとして知られ、一方では酒の容器となることから、酒好きを暗示するモチーフでもあります。

梅仙、拜山、鼓山はいずれもお酒が大好きだったとか。鼓山のこの瓢箪には、どんな意味があるのでしょうか。（井形栄子）



《瓢箪に紅葉図色紙》
吉嗣家資料



《寄合画賛》部分図
吉嗣家資料

いちまい 齋藤家資料

【菖蒲に兜図】

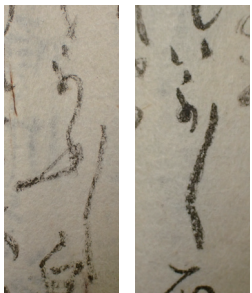
島原の乱図に登場する武将たちのかぶるような立派な兜が、菖蒲と二枝のよもぎのうえに置かれています。端午の節句にもちいる掛軸でしょう。この画稿は、画面右下の墨書から土佐光文の作品の写しとわかります。光文は、室町時代以来代々宮廷に仕えた土佐家の本家を継いだ絵師で、江戸時代最後の京都御所造営の際には、清涼殿などの障壁画を担当しています（『京の絵師は百花繚乱』）。

この画稿と類似した図様の秋圃の作品がドイツと日本に現存しています（『よみがえれ！ シーボルトの日本博物館』、『齋藤秋圃・梅圃関係資料』）。画稿と大きく異なるのは、菖蒲とよもぎを兜の頭頂部に挿したかのようにえが

ひとこと
くずし字

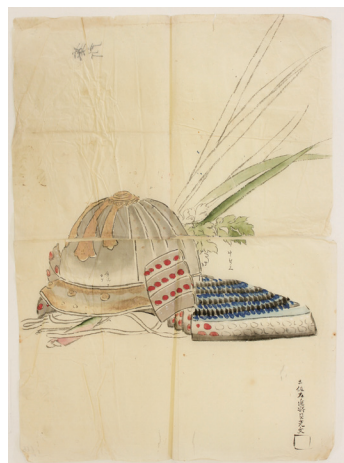
【く】

手書きで文章を書いていた時代、その手間を減らすため、先人たちは省略した文字を使用していました。今ご紹介する「く」という文字もそうした工夫の一種です。一見、ひらがなの「く」に見えますが、これはくの字点と呼ばれる繰り返しの記号で、二字以上の前の言葉を繰り返すという役割を持ちます。江戸時代の文書が多数ある齋藤家資料の中にも多数の繰り返しの記号が見られます。画面右は「いよく」と書き「いよいよ」、左は「よ



いているところです。鍬形の前立をもつ厳めしい兜も一輪挿しの花瓶のようです。

秋圃の魅力のひとつは、市井の人々やその営みに注ぐあたたかきまなざしです。邪気を払い、こどもの成長を祝う菖蒲に兜図の方が、いくさそのものを題材とする大作の島原の乱図よりも、秋圃の意にかなう制作であったようにおもわれます。（小林法子）

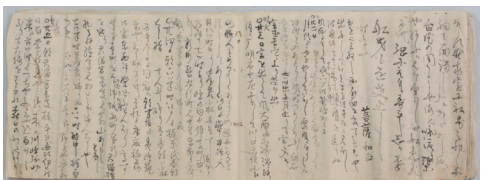


紙本着色 53.0 × 39.0cm

ふく」と書き「ようよう」と読みます。

繰り返しの記号は踊り字ともいい、他にも「々」「〃」「〃」など多数あります。前の字が一字か二字以上か、また、平仮名か漢字かで使用する踊り字も変わってきます。踊り字の歴史は古く、「く」は平安時代から使用されていたようです。宰府画報10号で紹介した合字「か」も文字を書く手間を省力化する役割がありました。

（木村純也）



齋藤家資料 《京遊日記》より